

おわるせかい



# おわるせかい

## 御品書き

- |                      |      |       |
|----------------------|------|-------|
| ● 桜咲刹那の場合            | 三毛猫  | … P04 |
| ● エヴァの場合             | 閑貴き  | … P06 |
| ● ウ十ら!               | 水陸両用 | … P10 |
| ● ツンテシに魔法を<br>ぷちかませ! | 送り狼  | … P14 |
| ● 終わりと始まりの宴          | 西北々  | … P19 |
| ● 杖とか槍とか棒とか          | 水陸両用 | … P33 |
| ● 綾瀬夕映の場合            | 三毛猫  | … P46 |
| ● エヴァの場合 其の2         | 三毛猫  | … P48 |
| ● 高音の場合              | 三毛猫  | … P50 |
| ● 龍宮真名の場合            | 三毛猫  | … P54 |
| ● 狼さんはネギまが<br>嫌いらしい☆ | 送り狼  | … P59 |

表紙・裏表紙

浅賀葵

挿絵・イラスト

西北々 遊壊蔵

関西の魔法使いを管理している関西呪術協会総本山。優雅で豪華な建物部の離れにその一室はもう何百年もひっそりと存在している。拷問部屋。謀反や規則違反などをしたものを収監するその部屋の存在を知っているのはごく一部の人間のみに公には存在していないことになっている。薄暗く狭い、窓も無い部屋で繰り広げられる光景は表の世界とは違い深く薄暗く、そして醜いものだった。

「ひっ……あっ……ふううっ……ひんっ……」

そんな部屋で天井から吊り下げられている少女——桜咲利那がぐもった声を上げる。白くて今にも折れそうな細い手首には縄がきつく結ばれており、それが天井の梁へと繋がっている。そして股間には少女の身体には似つかわしくない程の大きさのバイヴが挿入され鈍い音を立てていた。

「やっ……もっ……お、長……こっ、これ以上はっ……やっ……ああっ……」

利那の視線の先、そこには関西呪術協会の長であり近衛木乃香の父である詠春の姿があった。詠春は感情のこもっていない冷たい瞳で利那を見ている。

「お、おねがっ……も、だめっ……だめですっ……は、はああっ……」

「愛しい木乃香を危険な目に合わせたのだから、これくらいは耐えてもらわないとね。それにこれで終わりじゃありませんよ」

詠春はその能面のような表情を崩さずにバイヴのスイッチを入れる。すぐにバイヴが激しく暴れます。

「そ、そんなっ……はっ……やああっ……」

ビクン、と利那の身体がバイヴに反応して大きく震えだす。

「やああっ……あっ……は、激しっ……だめっ……だめえっ」

下腹部に徐々に広がっていく痺れるような刺激。その刺激に利那の地に着いていない足が何かを掴むかのように空中でもがく。

「ふふ、苦しいでしょう。でもさらわれた木乃香はもつと苦しかったのですよ」

詠春はそう言っ、おもむろに自分の袴を脱ぐ。利那の目の前に詠春のいきりたつた肉棒がさらされる。

「ひっ……あっ……お、長……んんっ……い、一体何を……？」

「御仕置きです」

それだけを言うと利那の後ろへと回った詠春は利那のアナルを広げる。初めて他人にその場所を見られて利那の表情が歪む。

「やっ……そ、そこはっ……ま、まさかっ？」

「そう、そのまさかですよ」

「ひっ……いやですっ。それはっ……それだけはいやあっ……」

詠春の言葉に事態を悟った利那は怯え暴れる。そんな利那の事など気にもとめずに、詠春は自分の肉棒を利那のアナルへあてがうと無理やり捻じ込んでいく。

「ひうっ、やっ……無理っ……そんなっ、やあっ……やあああっ」

悲痛な声が利那の口から漏れる。肉棒を突き刺されて利那のアナルは引き裂かれそうな程に拡張されていく。

「い、痛いっ。やあっ、やめてください。お、お尻、だめえっ」

利那の願いも虚しく詠春の肉棒が利那のアナルを犯す。苦しさと息苦しさに利那の口がまるで陸に打ち上げられた魚のようにパクつく。

「ふふ、なかなか良い気持ちですよ。ほらっ」

「いやあ、だ、駄目っ、そんなっ……くっ……はあっ……だめえっ」

詠春の激しい突き入れが逃げ場のない利那の身体を突き刺していく。その度に利那は嬌声を上げ、利那を捕らえている縄は軋み音を立てる。

「お、お願いですっ……も、もうっ……だめっ、へ、へんに……くはあっ……お、長っ……こっ、これ以上はっ……くうっ」

前と後ろの両方の穴を責められて利那は苦しげな声で懇願するが詠春の耳には届かない。それどころか詠春は利那の身体を抱え上げ制服を胸まで捲り上げると露出した乳房の乳首を指でつね上げる。

「ひうっ、やっ……やだっ……」

「嫌がっている割には乳首が立ってますね。尻の穴に入れられて乳首を摘ままれて感じているのですか？」

利那の乳首を弄りながら耳元で囁く。そこにはもう尊敬を集める長としての顔は一片も残っていない。

「そ、そんなっ……」

「やれやれ、これはとんだ淫乱剣士だ」

「や、やあっ……そ、そんな、そんなことおっ……」

「そんな淫乱剣士はすぐにイかせて上げますよ」

詠春の腰がさらに激しく動き自由の利かない利那の身体がまるで木の葉のようにガクガクと揺すられる。

「だ、だめっ。こ、このままで……やっ……だ、だめっ……」

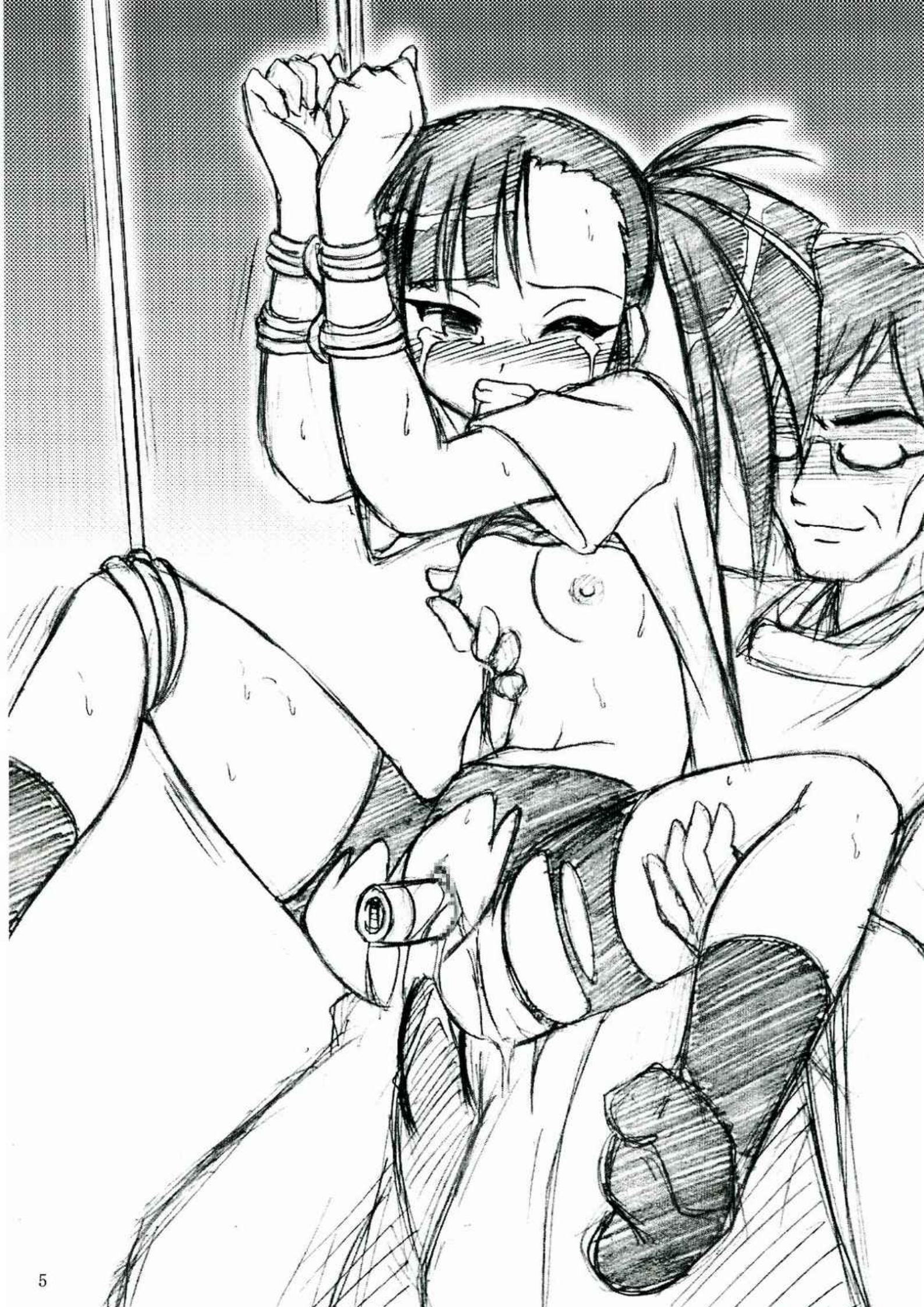
「ほら、イッてしまいなさいっ」

「や、だめっ……あ、ああっ……もっ……やっ……はあっ……イッ……イクッ……イッちやうの……やっいやあああ」

ビクビクと利那が絶頂へ達したと同時に詠春の肉棒からも大量の精液が利那のアナルへと流し込まれていく。

「あ……やあ……で、でてる……な、中に……やあ……やあ……」

下腹部に広がる精液の感触に涙を浮かべる利那。そんな利那を尻目に詠春は自分の肉棒を満足げに抜き放つ。抜いた途端に利那のアナルから大量の精液がゴボリと音を立てて流れ出し床に小さな染みを作っていた。



少女が目を見ます。辺りを見回すといつも自然と目にしてはいる闇に浮かぶ月が見当たらないことに気がつきベッドの上で身を起こしたのは吸血鬼のエヴァンジェリン。

いつも連れ歩いている茶々丸はハカセの希望で緊急メンテナンスの最中。人形の方も今日は留守番をさせていた。弟子のネギにも修行を休みにさせて、たまには一人静かに過ごすことにしていたのだ。そして学園内にあるもう一つの別荘に向かう最中、後ろから何者かに眠らされたことを思い出す。

「私が気づかなかったとは、それだけ衰えているということか……」  
冷静に周りを見渡す。どうやらここは自分の知らない建物の中だ。ここからどうやって抜け出そうかと考えていると、自分の近くで何者かの気配を感じとった。

「そこで隠れて私を見ているのは誰だ。早く出てくれば楽に死なせてやるぞ」  
隠れている者に殺気を向けると、闇の中から一人の男が現れた。どうやら黒いスーツを着ているらしく、顔だけがはっきりと闇に浮かび上がっている。

「そんな下品なことを言っただけじゃありませんよ。エヴァンジェリンさん」  
「……どうやら、私のことを知っているようだな」

男は気味の悪い笑顔を見せると、エヴァが寝ているベッドへと近づいてくる。  
「良く存じています。麻帆良学園中等部の生徒だということ。他にも貴女の身長から体重、スリーサイズに好き嫌い交友関係と何でも……」

それを訊くとエヴァは呆れた顔をする。どうやらこの男がわかっているというのは、自分がヴァンパイアだとか悪い魔法使いという深い部分のことではなく、表の顔。つまり表面上しか知らないのだ。そんなことは別に知られて困るような情報でもない。エヴァはこんな所に用はないとベッドから降りようとする。

「なっ……なんだコレは……」  
さっきまでは身体に異変は感じなかったはずだ。しかし今は指一本さえ動かすことができない事に気づく。何かをされた。そう感じたエヴァは目の前にまで近づいた男を睨むと、男は慌てて一礼をする。

「ご安心を、毒等ではありませんよ。ただし、少々の自由を奪わせていただきました。暴れられては困りますからねえ。」  
男は自分もベッドに乗ると彼女に覆い被さる。

「貴様は何が目的だ。何も知らないおまえにこんなことをされる覚えは無いぞ！」  
男は彼女の唇から漏れる息が顔にかかるほど、顔を寄せてくる。

「あなたに無くても、僕にはあるのですよ。一目見た時から今まで持っていた人形達が色あせて見えてしまってますね。そう、コレは一目惚れと言いますねえ」  
エヴァの記憶の底から恐怖が蘇る。ヴァンパイアになる以前、養父に弄ばれた日々のことを思い出したからだ。男の雰囲気はその養父とよく似ているため、彼女を恐れさせる。

そんな彼女を横目に、男はポケットからナイフを取り出すと、葉と恐怖で動けない彼女のワンピースを切り裂いていく。露出する白い肌と薄いピンク色の乳首

が外気にさらされる。それを、見た男は歓喜の声を上げる。

「……これだ、僕が追い求めていた人形はあ！」  
興奮した男はほとんど裸同然のエヴァを可愛がる。手は陶器のように白い肌を愛撫し、舌は小さく突起した乳首を丹念に味わう。

「止めるお！ この変態、お前なんかすぐに殺してやる！」  
エヴァの叫びは男には届かず、男も止める気配などまったくなかった。

「はあはあ、あもつと君のことを知りたいのに、どうすればいいのかなあ……」  
男の視線は、彼女の体を舐めるかのように上から下へと流れる。すると視線が静止した場所は彼女の下着だった。エヴァにも男の視線がどこに向けられているのかわかり顔が紅潮する。

「だっ、だめだ。そこは……やめろお！」  
男は彼女の下着に手をかける。その表情はプレゼントの中身を楽しみにしている子供の様であった。肌を傷つけないように、丁寧にナイフで下着を切り開く。

開かれたそこには、陰毛がまだ生えていないツルツルとした肌と縦に一筋の濡れた淫裂があり、男の目を釘付けにする。

「ここから僕らはひとつになれる。そうすれば他の人形達みたいに大人しく何でも言うことを聞いてくれるようになるんだあ」  
男はズボンを脱いで自分の下半身をさらけ出す。そこには黒く尖った男性の性器がヒクヒクと脈打っていた。

「さあ、これでエヴァも僕のこと大好きになれる。そして僕も君のことがもつと好きになれる。とつても喜ばしいことなんだあ」  
「やめろつ、そんなことつ、私はおまえなんかこんなことされる覚えはない！」  
「おまえじゃやない、ご主人様と言いなさい！」

男は叫び声と同時に彼女の小さな入り口に自分の肉棒をあてがうと、無理やりエヴァの中をこじ開けていく。引き裂かれる痛みと彼女の身体が悲鳴を上げ弓状になる。肉棒は狭い道を広げながら、ゆっくりと彼女の奥に侵入していく。

「いたつ、やめつ、がっ……こわつ、れつ、やめつ、ろお……」  
エヴァは痛みで耐え切れず泣き叫ぶ。男は涙でぐちゃぐちゃになったエヴァの顔にうつとりと見惚れていた。

「泣いても怒っても美しい。大丈夫、もうすぐ痛くなくなるから」  
彼女の一番奥に到達すると、男はゆっくり動かし腰を激しく前後にピストン運動し始める。十歳から身体の成長が止まった幼い肉壁が、男を拒もうと強く締め付ける。だが、この男にとつては痛みさえも快感でしかなかった。

「ふふ、感じる感じますよ。エヴァの愛があ、こんなに僕を気持ちよくさせてくれるなんて。ああ、このまますぐにでもイッてしまいたい！」  
男の限界が近づくとつれ、彼女の中で肉棒が破裂しそうなほどに膨れ上がる。

身体中が壊されてしまいそうな痛みに、エヴァはまともに声を出すことが出来なかった。



「がっ……ぐっ……や……やめ……なっ……な……ダメ……」

彼女の必死の思いが、わずかしかな力振り絞ってベッドのシーツを掴んで男から逃げる。すると隙内に入っていた黒い肉棒が彼女の身体から抜ける。それと同時に、彼女の目の前で男の中で溜まっていた欲望が吐き出された。飛散した大量の精液がエヴァの小さな身体を白く染めていく。

「ははっ、さまあ見ろ。おまえの思い通りになってたまるかあ……」

彼女の小さな抵抗は予想外だったのか、男は初めて怒りを見せた。

「何で僕の愛が分かるうとしない。僕がこんなにも愛しているのに！」

怒りに任せて、男は彼女の頬を真つ赤になるまで叩き続ける。今までの人形達は泣き出すと、すぐに自分の言いなりになっていった。だが、それでも屈しない彼女に男は苛立ちを感じていた。男は荒い息を吐きながらベッドから降りると、近くのテーブルの上に置いてある箱を手取る。中から薬と首輪を取り出し、不気味に微笑む。

「悪い子には御仕置が必要なのです。もう二度と逆らえないように特別な薬を用意しましたから、僕なしでは生きていけないようにしてあげます」

男は動くことの出来ないエヴァの口に無理やり薬を流し込む。そして再び彼女の隙内に自分の肉棒を突き刺す。一度通ったからか、それとも薬の効果が早くも効いているのか、さつきよりもスムーズに彼女の奥にまで到達する。

「ぐっ、やめろお、んっ、うあっ」

またも拒もうとするエヴァに異変が見え始める。体が火照り、少しづつ痛みの中に別の感覚が混ざりつつあることに気づく。男に犯されながら、彼女の中で痛みが快感に変わっていくことにエヴァは戸惑を感じていた。

「あっ、ああっ、はうっ、いっ、やっ、やめ」

「やめて欲しいのですか？それとも……」

男はにやりと笑うと、容赦なく腰を振る。エヴァは押し寄せる快楽を拒むことが出来ず、絶頂を男と同時に迎える。彼女と一緒に果てた男の肉棒から白濁液が隙内で開放され、収まりきらなかった精液が溢れて、ベッドの上に広がる。

男は虚ろな瞳で自分を見ている少女に、箱から取り出した首輪を着ける。さつきまで自分の言うことを聞かなかった少女。しかし、抵抗する力を失い自分の人形になったことの証として、この屋敷の主からエヴァへの初めての「褒美」だった。

それから数日後、この屋敷に何人かの男達が訪れる。食事を楽しんでいる男達の前に、この屋敷の主と真つ赤なドレスで着飾ったエヴァが現れる。

「皆様、お待たせいたしました。これが僕の自慢のお人形、名をエヴァと申します。さあエヴァ、皆様にご挨拶を」

彼女は小さくうなずくと、男達の前でドレスを脱ぎ始める。少しづつ露になる幼き少女の裸体に男達は息を飲んだ。薄いピンク色の乳首は小さく膨らみ、毛の生えていないアソコから溢れる液体が床を濡らす。そして雪のような白い肌は

触れただけで消えてしまいそうなほどに美しかった。誰もがためらうほどに彼女の造形は完璧だったのだらう。見ているだけで彼らは満足だったに違いない。しかし、屋敷の主は彼女に新たな命令を与える。

「エヴァ、皆様がおまえの美しさに戸惑われてみえる。ご奉仕してあげなさい。」

ゆっくりと近づくと、慣れた手つきで男の膨れ上がった肉棒を丁寧に取り出す。男のモノを愛しそうに見つめ、舌で出迎えながら自分の口元に運ぶ。亀頭を味わい、口の中で弄ぶ。れるれる、ちゅっちゅ、じゅるる。いやらしい音が部屋中に響き渡る。耐え切れなくなった他の男が、エヴァの前に自分の肉棒を差し出す。男のモノを細い指で絡めると、優しく前後にしこいていく。

男のうめき声と同時に、彼女の口の中から精液がこぼれる。白い肌をより白く染める。もう一人の男も耐え切れず精液をエヴァの顔に吐き出す。

「……美味しい。他の皆様もご遠慮なく私でお楽しみください」

その言葉に何も出来なかった男達はエヴァに駆け寄る。自分のモノでこの少女を汚したい欲望に囚われた男達は、次々と自分のモノをさらけ出す。

「こんなにいっぱい……うれしい」

男達の視線が自分のアソコに集中していることに気づいてエヴァは立ち上がる。「こちらも、どうぞお使いになってください」

惜しげもなくアソコを広げて見せていると、一人の男が彼女の身体を抱きかかえる。男は椅子に座り、エヴァと自分の腰を重ねる。小さな隙間は男の肉棒の大ききまで広がり、それでも肉棒を一気に飲み込んでいく。

「ああっ、とっても大きいっ、すっ、こっ、こんなあ……」

固まった肉棒と淫肉の擦れる感触に酔いしれる間も無く、口元に立派にそり上がった何本もの肉棒が用意される。ためらいも無く口元に運び、舌で舐め始める。男達も彼女の小さな胸の膨らみを赤ん坊のようにしゃぶり望むままに応える人形に取り憑かれていった。

「もっとお、もっとお熱いのを頂戴！かけてえ、いっぱいかけてえ！」

男達は入れ替わりながら彼女を輪姦し、休む間を与えずに犯し続ける。身体の中も外も男達の精液にまみれながら、エヴァは男達の狂った欲望を受け止めていた。その表情はとても嬉しそうで、終わらない欲望を貪り続けることが出来ることとが幸せでならなかった。

屋敷の主は彼女と客達を置いて別室に向かう。書斎だろうか、机の上には本が置かれていた。表紙には『麻帆良学園中等部3-A クラス名簿』の文字。主はじつと見ると気に入った生徒に丸をつけていく。他にもどこからか手に入れた資料を見て少女達を値踏みする。

彼にはもうエヴァは必要ない。もう飽きてしまったからだ。だから男達に与えたのだ。彼女がどのようになるかと知ったことではない。次の人形のことしか主の頭の中には無かった。





ウナら！ 水陸両用（ファイプロ好き）

んっ…

はあ…



ふふふ、どんなに魔力が強大でも  
さすがにこっちはまだまだお子様だな



どうした、そんな顔されたら  
こっちも我慢がきかなくなるじゃないか



あっ

ま、師匠っ！



んっ…  
貴様も男なら少しぐらい抵抗して  
私を楽しませてみる



うあっ

あ…









ツンデレに  
魔法をぷちかませ!  
送り狼

アスナには  
悪意のある魔法は  
効かないらしい  
という事で  
実験してみよう。





知しやん

ホシマに知しやん。



超高等魔法:七鍵守護神(ハーロイーンと読む)18巻くらいまでのダークシュナイダーの最強呪文。  
爆乳大元帥ポルノ・ディアノには簡単に防がれてしまった。



神楽坂優奈：銀河お嬢様伝説ユナの主人公ユナの本名。PCエンジンを代表する美少女モノでハドソン製。ラストになると出てくる巨大ロボット、エルライン・ノイがヒジョーにかっこいい。



オレはムリ。



ギガの方：重破斬（ギガスレイブ）リナ・インパースの最強呪文。  
不完全版と完全版でちょっと呪文が違う。使うと髪が真っ白になったり世界滅ぼしたりしちゃう。  
魔王シャブラングドゥを超えるし様の力を借りる事で発動。



# 線引きくらい使え!



単行本資料に  
おくるつつつても  
断るしよ

そろそろネギまに  
移って半年以上というに  
描けるのが4人って  
どーよアナタ

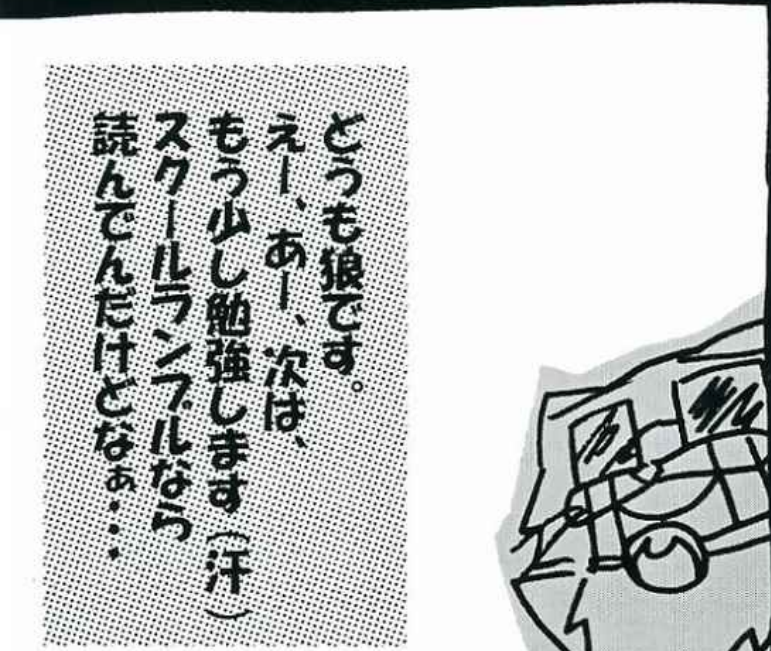


名前知らんヒト  
が描けるようになった。



「・・・嫌いやねん  
アカマツ漫画」

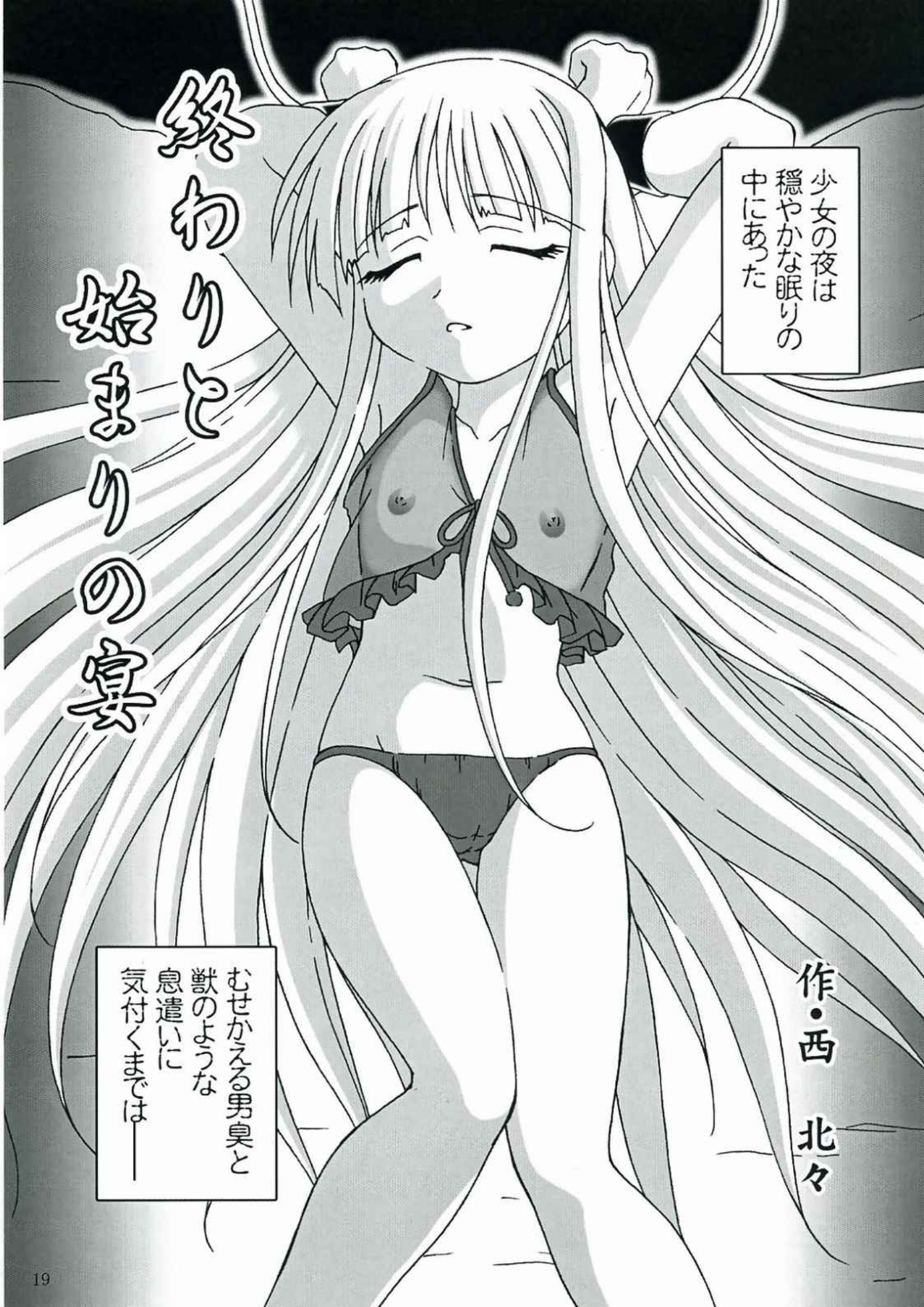
「うおっ、ネギまの同人誌で  
なんたる暴言」



どうも狼です。  
えー、あー、次は、  
もう少し勉強します(汗)  
スクールランブルなら  
読んでんだけとなあ...



『そこはまあいいから  
メガネコを描きなさい』  
青柳の御大にはメガネコしか  
見えていないぞ!



少女の夜は  
穏やかな眠りの  
中であつた

終  
わりと  
始  
まりの  
宴

むせかえる男臭と  
獣のような  
息遣いに  
気付くまでは――

作・西 北々





人間としての最後の晩餐は楽しんだかね？

—その記憶を忘れぬことだ

高貴なる眷属となるために



…なにを

するつもり…？

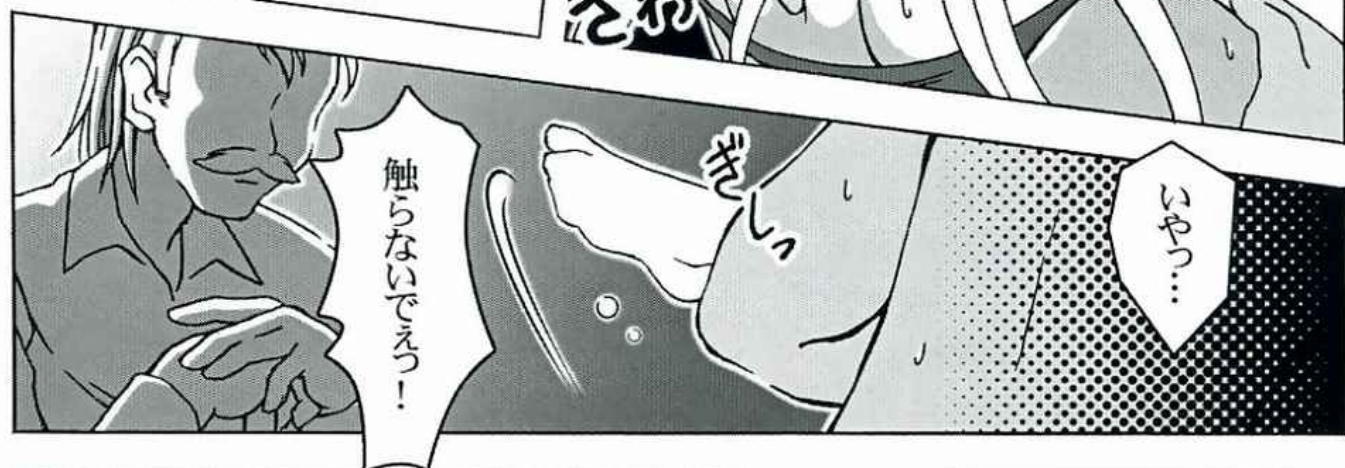


…はじめよう

大いなる儀式を



いやああっ！！







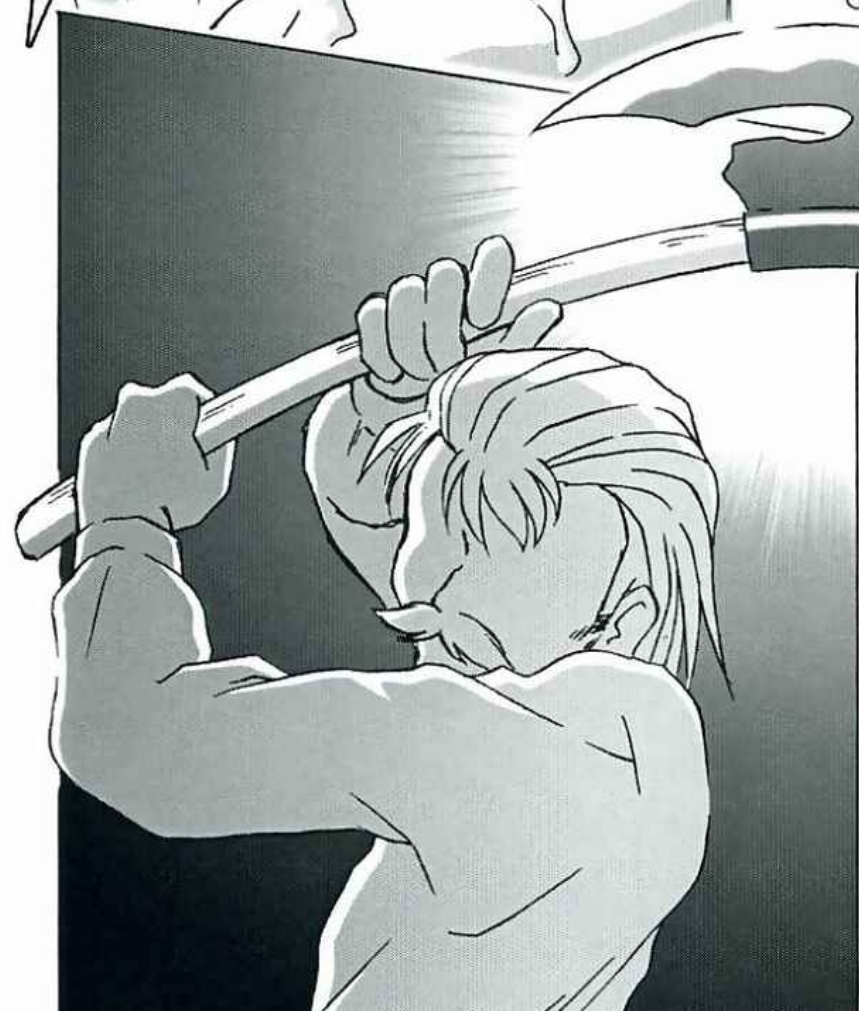






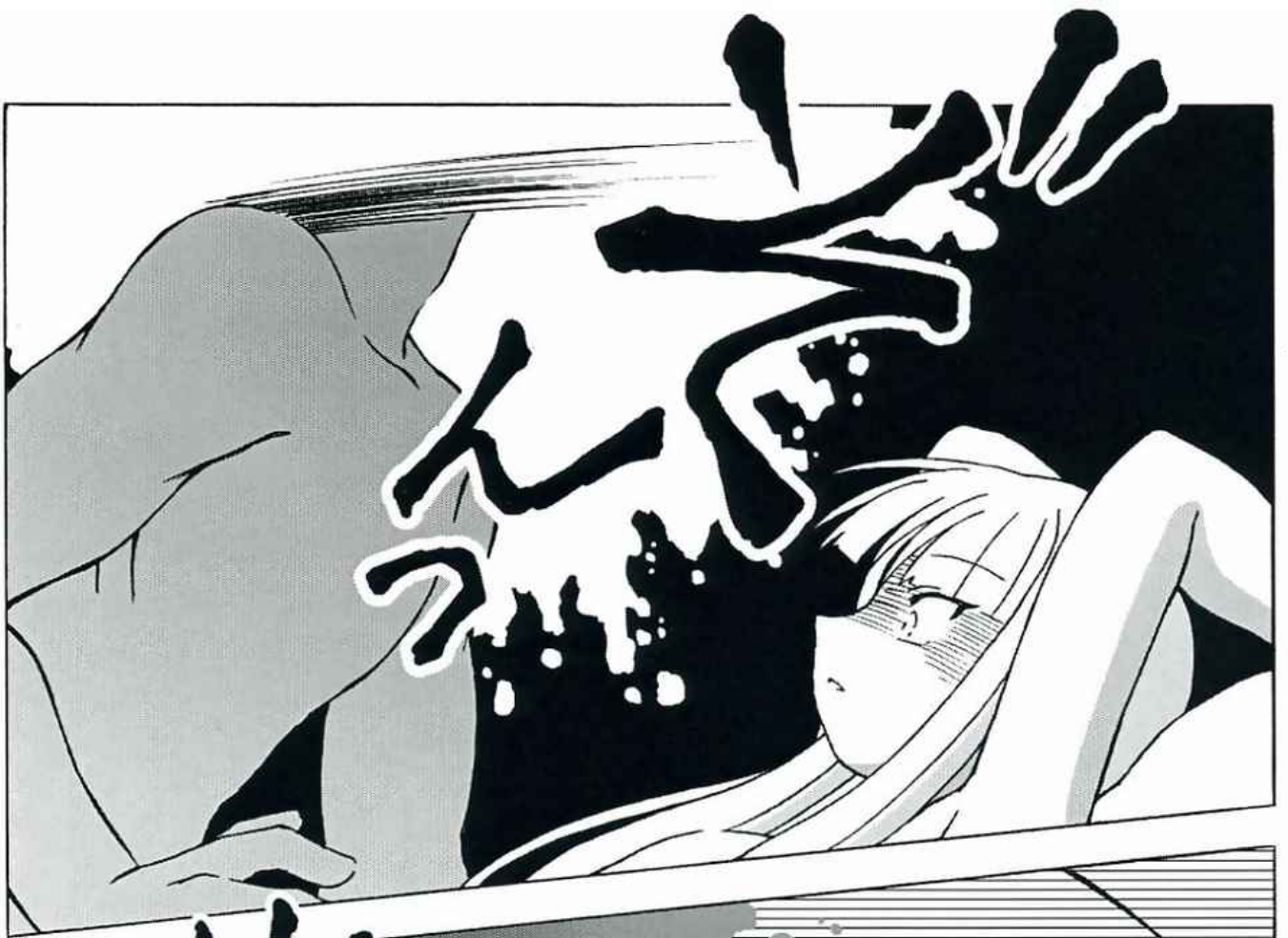
はははははは...♡

びん



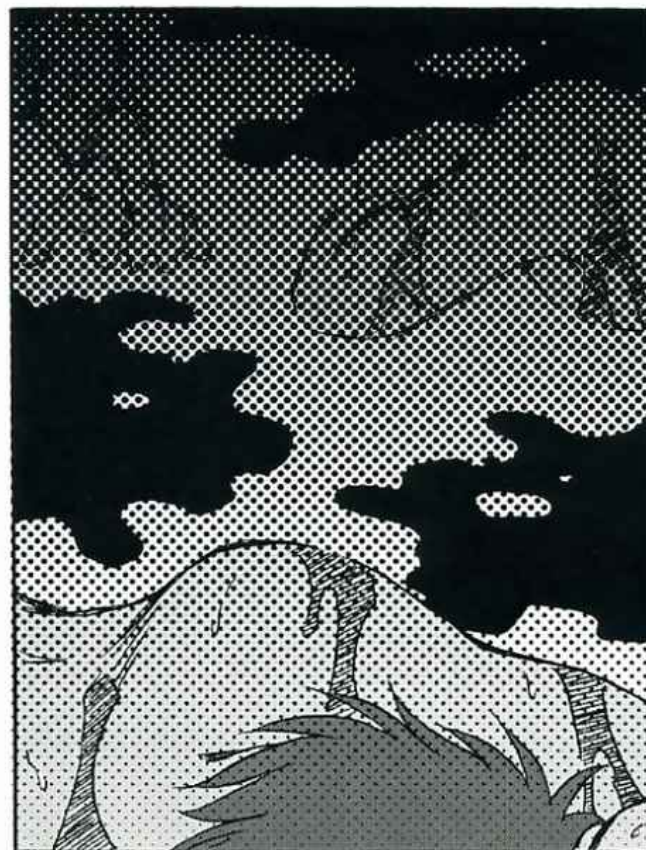
かたん...

...そろそろ  
頃合いか





悦ばしい  
ことだ—



…生まれ変わった  
気分はどうだ？

灼け付くような  
渴きだろうか？

極上のワインでも  
濁りなき清水でも  
癒せぬ

ただ求めるは  
赤く滾る  
血潮のみ――

そのどす黒い  
感情を忘れるな――

目隠し眼だ

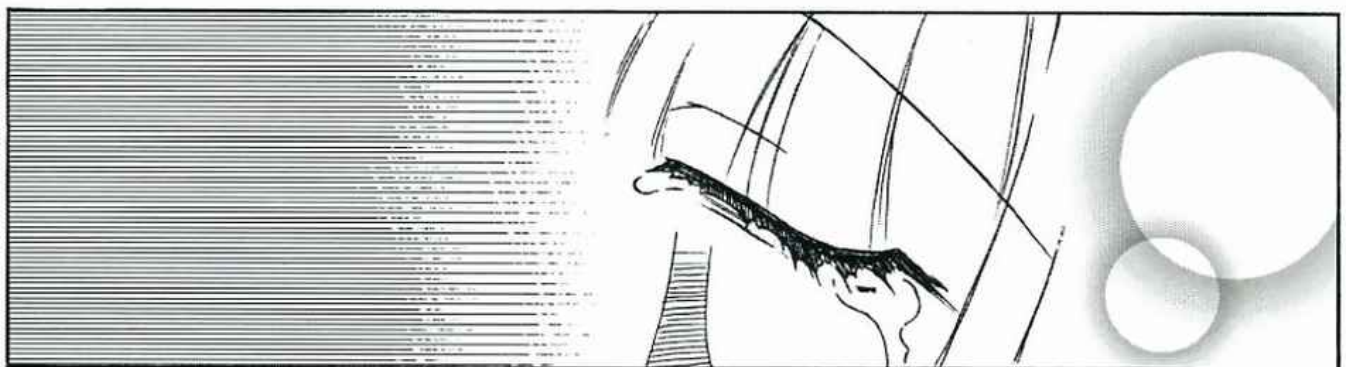
脆弱な存在だった頃の  
愉悦の記憶と共に

心の底から  
昂ぶらせるがいい

…其れが



としえ  
永久を生きる  
糧となる——



END

まいど!西 北々であ♪

今回はちょっとダークな方向で、  
エヴァのお話しを描かせていただきました。

もう設定もへったくれも無く、  
描きたいように描いたので  
どういう内容の儀式なのか  
深く考えるとバカを見ますので  
あしからず(笑)

ダークな雰囲気を出すために  
色合いを濃い目に描いてみたんですが、  
ベタを全然使いこなせてません★  
要修行!

三毛猫堂で描くと、否応無く陵辱ものを  
要求されるのですが…

ホントはこんな絵を描きたいの  
じゃあ〜!  
薄い胸は描いてこ  
つまらん(爆)

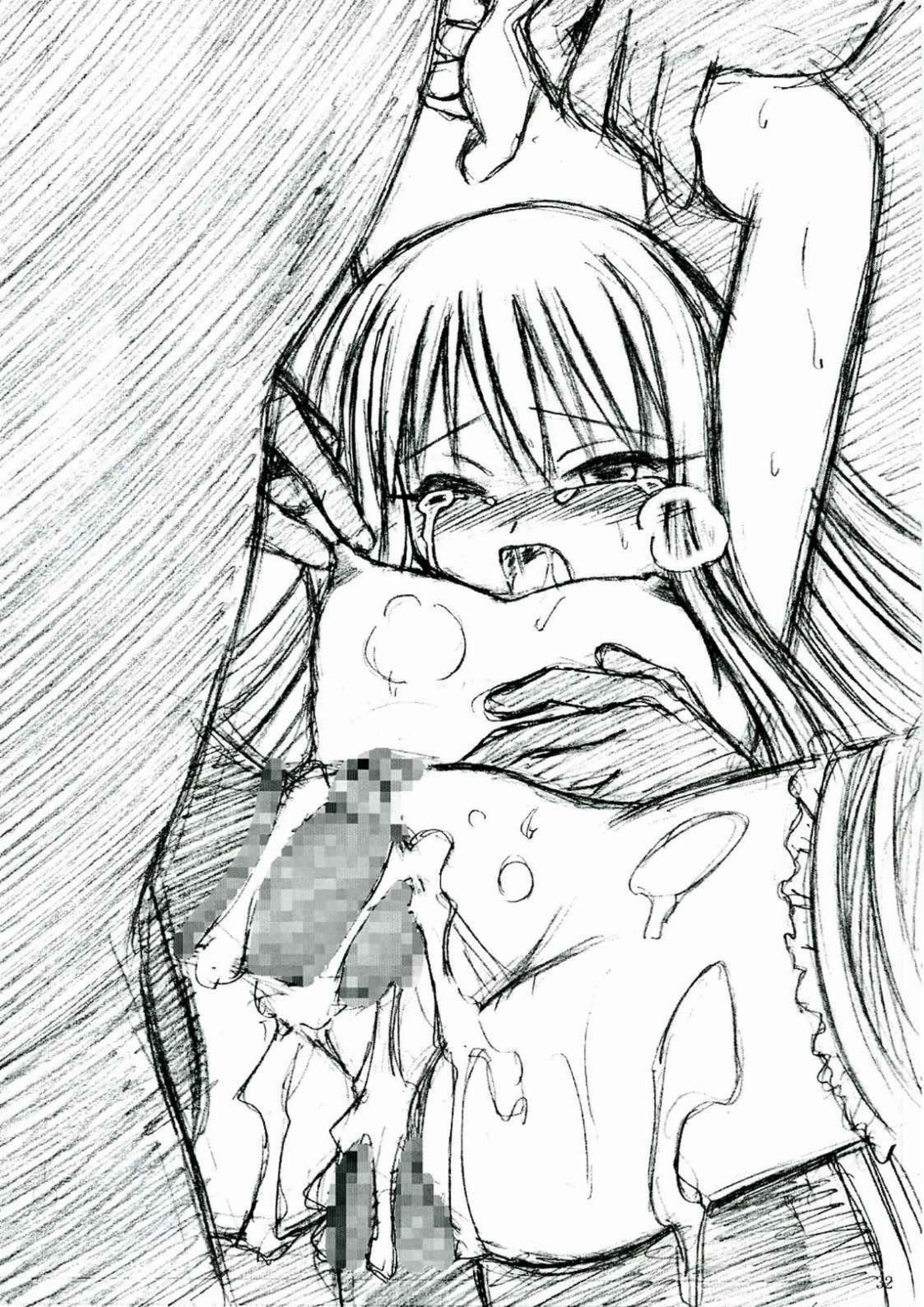
そんなカンジで  
純愛至上主義で  
触手愛好家の  
西北々でした☆

ちづる姉萌え。



メ切前夜

西北々



よし、今日は杖を使った  
槍術の自主トシだ

リーチが長い分  
かわった攻撃ができるかもしれないし…

えっとまずは

「戦いのうー」

むずっ

ーふえ

ぐ  
ちゅっ

杖とか槍とか棒とか

水陸両用



で……？



ばっちり魔力供給されてるみたいで…

アホか…



マスター

ん？



やはり  
そうなってしまっている以上

出すべきものを  
出せばよろしいのでは…

まあ…だろうな… (汗)



はい、くしゃみで  
ターゲットがズレたらしくて

その…全然おさまらないんです



は!?

ということでは  
ここはマスターがネギ先生を  
射精させて...

弟子の不始末は  
師が責任を持って処理するのが普通かと...



師匠自らなんてっ!

.....☆

ありがとうございます  
師匠!

こんなものクラスのガキ共  
オカズにしてマスでもー



ちよっとまてっ  
なんで私が!



ん?

失礼しますマスター



だいたいキサマは  
くしゃみなんかで外れる  
ユルユルの栓をどーにかしろっ

ググ  
ググ

だ・か・ら!  
一人でやってると言っるとるだろうが!



いっ…  
いきなりなにをする！  
はなせっ！

ひよいっ

!!



わっ！コラッ！！  
やめんか茶々丸！！

する

じっとしててください  
マスター





あっ!?!  
あっ...

や...、そ...なっ  
出しなが...らっ

ちかぽ  
ちかぽ



んん...

?!?

ふう

す...  
ず...

んん...  
あま...

びゅん  
びゅん



マスター

はっ

はっ



ふん

ひあっ

ふっ

ちゅん

びゅん

もぞ



んあっ



すみませんっ  
腰が...っ  
止まらないんですっ

んん



はあっ!?

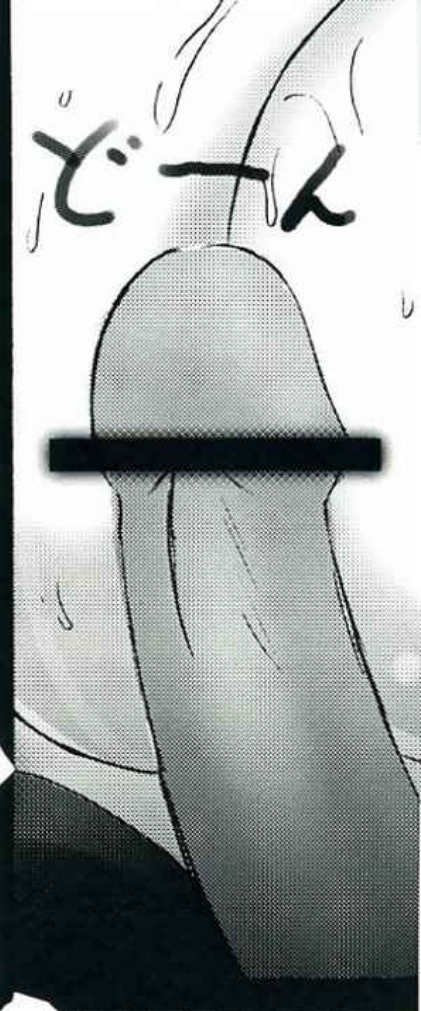
んっ

ちよ…  
なんだそれはっ  
茶々丸!

ふうっ

マスターのために  
ハカセにお願いしました

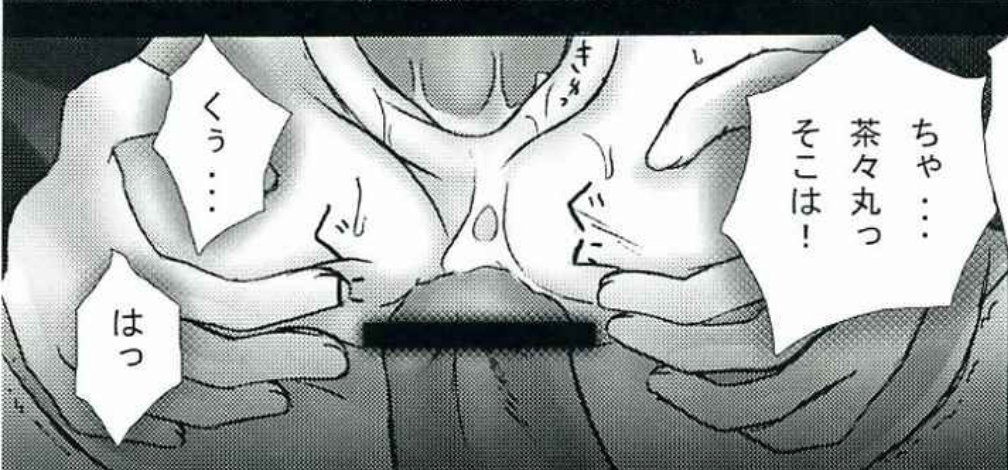
これでマスターも気持ちよく  
なっていたらどうかと



どーん



なっ!



くう…

はっ

ちや…  
茶々丸っ  
そこは!



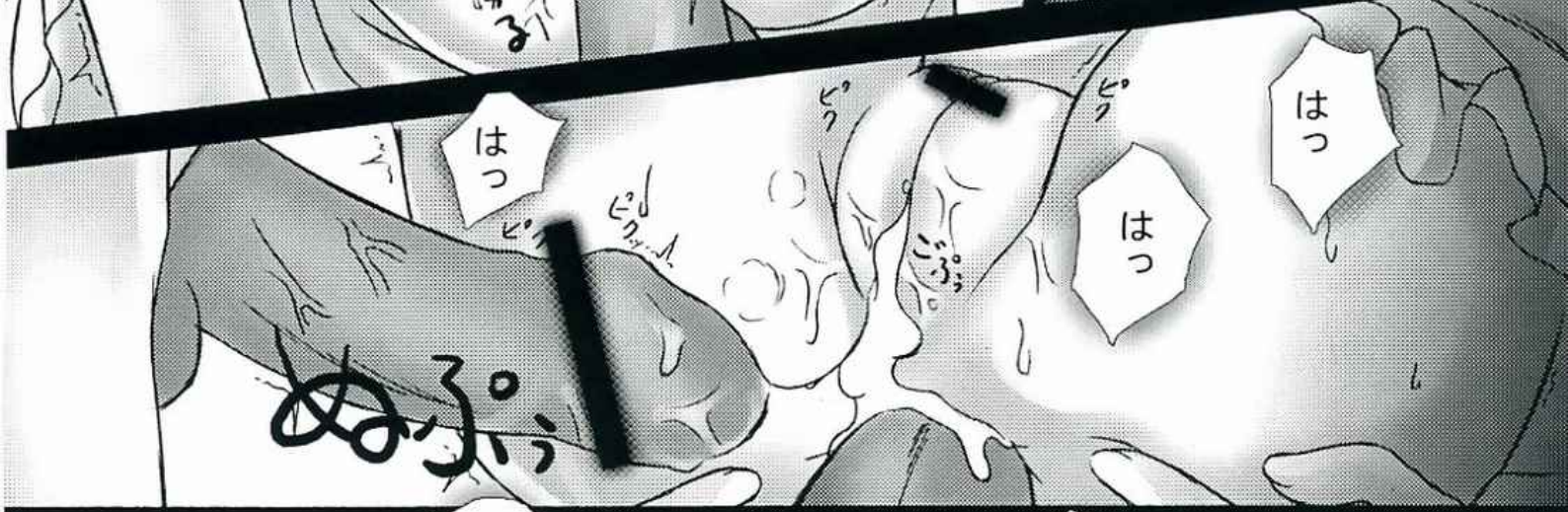
!!

お…おい  
何言ってる…



あ、あああああ…

あ…が…  
は、入って…



ではお口を使ってはどうでしょう  
まだマスターに二本は  
刺激が強すぎるようですし

ネギ先生  
まだおさまらないのですか？

あ、はいっ  
はあ  
はあ

はち  
はあ













「や、嫌です。こんなつ、嫌です、いやあつ」  
薄暗い部屋に夕映の悲痛な声がこだまする。夕映は全裸で身体の自由を奪われていた。しかし周りで見ている男たちは助けもせず顔に笑みを浮かべてその様子を見ているだけだ。

「お、おねがっ……はっ……やあつ……こんなつ……やあですつ……」  
ガチャリと夕映の手足を拘束している鎖が音を立てる。手首と足首を枷で固定された夕映は全く身動きが取れない。

「へへへ、良い眺めじゃん」

ニヤリと笑って男が無慈悲にカメラのシャッターを切る。フラッシュの光が夕映の身体を照らし夕映は恥ずかしさから顔を背ける。

「ほらほら、記念なんだから逃げないでよ」

「やだあつ……いやですつ……いやあつ」

「んだよ。まだ御仕置きが足りないようだなあ」

男の一人が夕映の股間へと通されている縄を引き上げる。

「ひううううつ」

ぐいつ、と股間に縄が食い込みショックで夕映が甲高い声を上げる。男はそれを気にも止めずにさらにロープを上へ上へと持ち上げていく。ぎりぎり縄が夕映の股間を締め上げる。

「やっ……い、痛いつ……いやあつ……縄っ、く、食い込んでっ……だ、だめですうっ……はあつ、ああああつ……」

痛みと羞恥心で身体を震わせる夕映。別の男はさらに夕映の乳房へと腕を伸ばしていく。

「やっ、やめてっ」

「へっ、小せえ胸だなあ」

「まっ、小さい方が感度は良いって言うじゃん？」

男が夕映の乳房を無造作に摘み上げる。桜色の乳房が引つ張られて形を変える。

「はうっ……いたっ……や、やあつ……」

「んー、感度はまあまああってところかな」

「くふっ……や、やです……やめてくださいっ……」

瞳に涙を溜めて懇願する男はその行為を止めようとはしない。それどころかさらに強く力を込めて乳房をこねまわしていく。

「ひぎっ……あ、あああつ……だ、だめっ……ち、乳房っ……だめっ……だめですつ」

「そーだ、良い事思いついた」

「……えっ？」

怖がる夕映を尻目に、男はおもむろに洗濯バサミを取り出すとそれで夕映の乳房を挟んだ。挟まれた痛みで夕映の顔が苦痛に歪む。

「痛いつ……やっ……やめてっ、やめてくださいっ……」

「なかなか良い格好だぜ」

夕映の格好を見て男が満足そうに頷く。調子に乗った男は洗濯バサミに付けられた紐を引つ張る。ピンツと紐が張り夕映の乳房が伸ばされていく。

「ひいつ……」

「ほらほら、凄く乳房が伸びるぜ」

「やっ、やああ……。いたっ、お、お願いで……す……もう……やあつ……やあですつ……」

「まだまだ、こんな楽しいこと止められるわけじゃないじゃん？」

もう一人の男が再び股間の縄を持ち上げる。痺れるようなくすぐったいような感覚が夕映を襲い小さな身体をふるふると震わせる。

「ひやうっ……ひやっ、はうううっ……」

「あれ、縄が湿ってるぜ。もしかして夕映ちゃん感じてる？」

「そ、そんなつ……あ、はあつ……わ、私はっ……か、感じてなんかっ……くっ……くふうっ……」

頬を染めて必死になって言い張るが、夕映の意思とは裏腹に股間は確かにぬるりと湿ってきていた。その証拠に確かに縄も湿り気を帯びている。

「拘束されてアソコ湿らすなんて夕映ちゃんに変態なんだねえ」  
「そんな変態には罰を与えないとなあ」  
そう言う男達は一気に夕映を責めていく。股間に縄を擦りつけ、乳房をさらに引つ張っていく。身体中を拘束されている夕映は男達に抗うことが出来ずになすがままにされるしかなかった。

「だ、だめっ……ですつ……だめええええつ……あつ……やあつ……だめっ……だめですつ……だめええええつ……」

ビクンと夕映の身体が絶頂に達して大きくはげずる。それと同時にビチャビチャビチャと水音を立てて夕映の股間から小便が漏れ出す。

「うわっ、こいつ小便漏らしやがったぜ」

「イッた瞬間に小便漏らすなんてやっぱり変態だな」

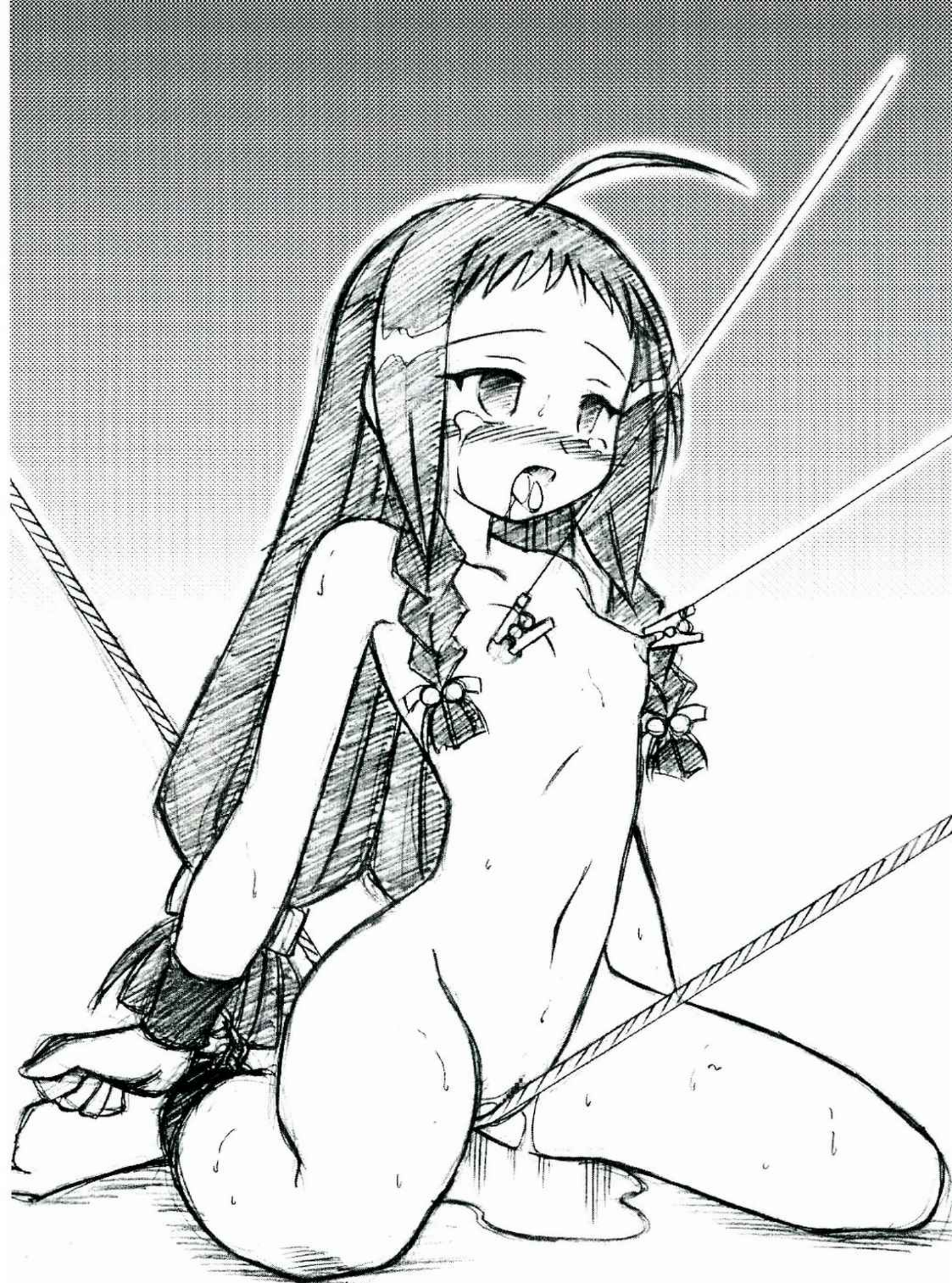
男達が侮蔑を含んだ瞳で夕映を見下ろす。その間にもカメラのフラッシュが夕映を照らし続け夕映の痴態がカメラに収められていく。

「やあ……こんな……こんなところ……やだあ……見ないで、見ないでください……。やあ、こんなつ……ぐすつ、やです……」

小便で水びたしな床にべたりとしゃがみこんで、夕映は人目もはばからず泣きじやくる。

「さあて、これから本番だぜ」

男達は欲望にまみれた顔で夕映へと近づいていく。夕映への陵辱劇はこれから本番だった。



「んっ……んふっ。くちゅっ……ちゅばっ。くすっ、いいぞ出しても……」  
淫靡な表情をした少女の顔に男の精液が降りかかった。粘つき熱を持ったそれを少女は嫌な顔ひとつせず指ですくい自分の口へと持って行く。

「ふん、まあまあだな……」  
精液をまるで極上の料理の様に舌で味わい喉をコクリと鳴らして飲み干す。口の端に残った残滓を舌で舐めとる姿が幼い外見にそぐわずになやましい。

「やはり普通の人間では魔力が足らんか……」  
独り言を呟いて、少女は別の男の肉棒を咥え込む。薄暗い小さな部屋だというのに周りには何人もの男の姿があった。しかしその誰もが輝きを失った瞳で虚空を見上げている。ただ肉棒を怒張させたまま、まるで人形のようにピクリともしない。

「ふふ、まあ良い。こういうのもたまには悪くはないしな」

ニヤリとしか形容できない顔で少女が笑う。それから少女は小さな声で何やら呪文のようなものを呟く。それに反応してさつきまでピクリともしなかった男達がふらふらと動き出す。

「ふふふ、私を最後まで楽しませてくれよ」

男の一人が少女の小さな身体を抱え上げる。簡単に持ち上がる少女の身体。男はそのまま少女の小さなアソコに自分の肉棒を侵入させていく。

「んっ、くふんっ」

ピクリ、と肉棒の挿入される感触に少女の身体が震える。しかしその震えは痛みからなごくるものではない。その証拠に少女の顔は歓喜に染まっている。

「んっ、いいっ、いいぞ。な、なかなか大きくて立派なモノを持っているじゃないか」

男の肉棒をスムーズに咥えこんで、少女は自分から腰を動かし始めていく。愛液と精液を潤滑油にして、少女が腰を肉棒に沈める度にくちゅくちゅと辺りに卑猥な水音が響き始める。

「くふっ……んっ……はっ、はうっ……んっ……はあっ……いい、いいぞっ。もっただ、もっと激しく動けっ」

少女の命令に従って男がさらに激しく腰を少女に打ち付ける。その度に少女は甲高い声を上げて身体を震わせる。肉棒は少女の膣内で暴れまわり奥深くへと入っていく。

「はあっ……そ、そうだった……いいっ……んっ、んはっ……はあっ……」

少女の顔が熱に犯されているかのように赤く染まる。身体は桜色に染まり女の匂いを辺りに漂わせていく。

「んんっ、はっ、はあっ……よ、よし、お前もこっちに来るんだ……」

言われたとおりに近寄ってきた男の肉棒に少女は何のためらいもなくしゃぶりついていく。少女の絶妙の舌遣いですぐに男の肉棒は固くなる。少女は小さな口一杯に広がった肉棒を咥え込み丹念に舌を絡めていく。

「んっ……はあむっ……れるっ、んちゅっ……んんっ……はっ……はあっ……」  
気持ちが良いのだろうか、意識の無い男が小さくうめく。それを見て少女が満足そうに笑う。少女の身体も同じ様に男の突き入れによって反応し、艶のある声が口から漏れ出していく。

「んはっ、はあっ、いい、いいぞ。そうだ、もっただ、もっと私の中を掻きまわすんだ」

男は忠実に少女の命令を聞く。少女の身体を両手でしっかりと固定すると激しく肉棒で突き上げる。グチュグチュという激しい音と共に少女の膣内が肉棒で擦られていく。余程気持ちが良いのか少女が一際大きな嬌声を上げる。

「んちゅっ、ちゅっ、はっ、はあっ……んくっ……ふううんっ……。はっ、はあっ……んふっ……そこっ……んふっ、いいっ……」

男達によって少女の身体が絶頂へと押し上げられていく。少女の身体中から吹き出す汗と立ち上る淫臭が交じり合い辺りにむせ返るような甘美な匂いが漂いはじめ部屋を満たしていく。

「はっ、んんっ……くっ。イクっ……あ、はあっ」

少女のアソコがキュッと締めまり男の肉棒をきつく締め上げる。それが呼び水になったのか、男の肉棒から大量の精液が膣内に放出される。ドクドクと流し込まれる精液に少女の腹部が熱を帯びる。同時に少女の身体も大きく震えて一気に絶頂へと少女を押し上げる。

「あっ、はっ、くっ、はああああっ……」

下腹部に感じる精液の生暖かい感触が消えないうちに、すぐにもう一人の男も絶頂に達して少女の顔へと精液をかけていく。大量の精液が再び少女の顔を白く汚していく。

「んぶっ……んんっ……んちゅっ……コクッ……んっ……はあっ……」

少女は顔を流れる精液を嬉しそうに口で受け止めた。男たちは精液を出し尽くして力尽きたのかその場へと倒れこんでしまう。

「ちっ、根性無しどもめ、もう終わりか。チャチャゼロ、次の獲物を探しに行くぞ」

少女の言葉に影に控えていたチャチャゼロと呼ばれた人形が現れる。

「ワカツタゼ、御主人。ナアナア、ソノ前ニトドメ刺シテイイカ？」

「くだらん、放っておけ」

「チツ、ツマンネーナ」

少女はチャチャゼロを引き連れてまだむせ返るような臭いが充満している部屋を後にしていく。少女の名前はエヴァンジェリン・A・K・マグダウェル。これはまだ、少女が学園に来る前の遠い昔の話。









「ちっ、我慢できねえ。取りあえず握れよ」

高音の手に自分の手を重ねると男は自分の肉棒を握らせる。先端から我慢汁が出て肉棒はヌメヌメとしていて高音がこするとぬちやぬちやと音を立てた。

「ほらあ、また口がお留守になつてるぜ」

「んっ……んふっ……ふっ……んちゅっ、ちゅっ……くはっ……んんっ……はっ……はあああ……もっ、やっ……やめっ……なっ……あああ……」

「そ、そろそろイク」

膣内で男の肉棒が大きくなっていくのがわかる。限界に近いのだろう、男の腰の動きが段々と激しくなっていく。

「中にたっぷりと出してやるからなっ」

「やっ……やああ……なっ、なか……なかつ……だめっ……だめっ……んんっ……はっ……」

「くっ」

「やっ……だめっ……おねがっ……やっ、やあああ……」

高音の願いも虚しく男の肉棒から大量の精液が放たれる。熱を持ったそれは高音の中一杯に広がり絶望に高音の顔が染まる。

「こっちもイクぜ」

「俺もだっ」

別の男達も何の遠慮もなく、それが当然ともでもいうかのようになんかでもかたばかりに高音に精液を浴びせかける。熱い精液が内外に注がれ高音の顔が悲しく歪む。胸にも顔にも男達の精液をまるでシャワーのように浴びながら、それでも高音にはどうすることも出来なかつた。

「ひう……あっ……あああ……」

最後の一滴まで高音の膣内に出し尽くして、男はやつと高音の中から肉棒を抜いた。抜いた途端にゴボゴボと精液と血の混じり合った桜色のモノが高音の股間から溢れ出す。それは高音の純潔の証だつた。

「なんだ、コイツ処女だつたのかよ。どうりで痛がるはずだ」

「うわっ、いいなあ。初物喰いかよ」

処女だつた高音を犯したというのに、男達の顔には罪悪感などは欠片も感じられない。それどころかボロボロになつた高音に男達の遠慮の無い言葉と嘲笑が浴びせかけられる。男達にとつては高音が処女だつたことなどは何の意味もないようだつた。

「も、もう……これで、いいでしょう……」

グツタリしながら、しかしそれでも高音は男達をにらみつけながら口に出す。その目はまだ光を失ってはいない。その態度が気に食わなかつたのか、男は舌打ちしたかと思うと、次の瞬間には高音の腹部に蹴りを入れていた。

「ふぐっ……」

衝撃を受けて高音の身体が勢いよく床に転がる。男はつかつかと苛立たしげに

仰向けになつた高音の元へと辿り着くと、腹部に無慈悲に足を下ろす。

「うあっ！」

鈍痛が腹部に走り、高音が苦しげな声を漏らす。しかし男は足を上げることもなく腹部を踏み続けている。

「くはっ……あつ、やっ……やめっ、いやあつ！」

「何を生意気なこと言つてるんだ、手前は？」

「そ、そんな……ぐっ、あはあつ！」

そんなことはない、という前に再び腹部を乱暴に踏みつけられ高音は声を殺されてしまう。痛みでもう荒い息を吐くことしか出来ない。

「お、ま、え、は、膣内からこんなに精液漏らしながら何を生意気のことを言っているんですかあ？ なあ？ 聞いているのか？ なあなあなあ？」

「はっ、ぐっ……ぐはっ……あああ……」

ぐりぐりぐり、と男の力は段々と力強くなっていく。息もろくに出来なくなり高音の視界が白く染まっていく。このまま意識を失いそうになると高音が思った手前でやつと男は足を上げた。

「ひぐっ……あつ、はっ、ごほっ……ごほっ……はっ、はあ……」

新鮮な空気を吸い込みつつ高音は涙目で男を見上げる。涙で濁つた視界の中、男が乱暴な笑みを浮かべているのが高音にはやけにはつきりと見えていた。

「ははっ、どうして止めたのか教えてやろうか？ このままお前の意識を失わせて犯すのも楽しいけど、声を聞きながら無理やり犯す方が面白いからな」

「なっ……」

「生意気なその態度、へし折つてやるよ」

その言葉を合図にしたかのように、男達が再び高音へとピラニアのように群がっていく。高音に馬乗りになりこじ開けられたばかりのアソコへと肉棒が埋まっていく。

「ひっ、やっ、だめっ……もっ、もうっ……ひっ、あああ……」

ぐちより、と音を立てながら精液を掻き分けて肉棒が高音の膣内へと侵入していく。最奥まで辿り着きすぐさま男は欲望に任せて腰を動かし始める。

「やっ、やああ……あああ……」

「二回目なんだから慣れるよな」

悲鳴を上げる口もすぐに肉棒で塞がれる。乱暴に身体を抱え上げられ高音はろくに動くことすら出来ない。そんな高音を貫きながら男は高音の耳元で囁く。

「時間はまだまだあるからよ、のんびり行こうぜ。一日中犯しつくして従順に仕込んでやるからよ」

その言葉と同時に再び膣内に精液が流し込まれていく。熱い精液を受け止めさせられ高音の身体が震える。休む間もなく次の男が高音の膣内を貫く。男の言うとおり高音が開放されるのはまだまだ先のことようだつた。



「つあつ、ぐつ……はつ、はあああつ……」

まるでカエルの皮膚のように湿ってヌメリとした感触。それが蛇のように意思を持って一人の少女——龍宮真名の秘所を犯していた。すでに来ていた服は剥ぎ取られ真名は全裸だった。その褐色の身体には何本もの触手が絡みつき、真名の身体を自由を奪っている。

「はつ、あつ……はつ、くつ、くうつ……あつ、はつ……」

この場所に真名は一人きり。捕まっつてしまつた以上は誰か助けを呼ばねばならない。だが真名は楽な仕事と思ひ誰もパートナーを連れて来なかつたのだ。そのことを後悔してももう遅かつた。助けを呼ぶのもここから脱出するのも自分一人の力で何とかしなくてはならない。例えその可能性が限りなく低かつたとしてもそれしか方法がない。

「くつ、はつ、離せつ……くそつ、くうつ」

中空に絡め取られながらも何とか脱出しようと触手に爪を立てる。しかし触手はそんなことではビクともしない。それはそうだろう、何故なら真名の持つていた銃でさろくダメージを与えることは出来なかつたのだから。

「ぐあつ、はああつ……そつ、そこはつ……んくつ……くうつ……」

真名の抵抗などど吹く風で触手は真名のアナルにまで侵入して行く。小さなアナルを乱暴にこじ開けられ触手が真名の中に入ってくる。痛み真名の身体が弓なりに弾け苦しげに声を漏らす。

「はつ、あつ、ああつ……んつ……はつ……あああつ……あつ、ああつ、やつ……やめつ……くつ、はああつ……」

ねじり込むような触手の動きにアナルが拡張されていく。苦しみに真名の額に脂汗が浮かぶが触手が真名の身体を気遣うなんてことはしない。さらに乱暴に真名の奥を目指して動くだけだ。

「はあつ、あああつ……あつ、ぐつ……はあ、ふつ……ふあつ、はああつ……」

アナルと秘所の二ヶ所を貫いた触手が別々に動き始める。身体の中で暴れまわる触手の痛み顔をしかめる真名。触手はそれぞれが乱暴に動いて真名を責め続ける。まるで人の指のように中で動き、その刺激に責められ真名の身体には力が入らなくなっていく。

「ぐつ、はつ……つつ……はああつ……あああつ？」

真名の中に入っている触手が太さを増す。ビクビクと律動しながら太くなつていき、それに合わせるかのように動きも激しいものになつていく。

「くあつ、はああつ……まつ、まつ……くつ、うううつ……」

嫌な予感をして必死に暴れる真名だったが、やはり身体はビクリとも動かない。それどころかさらに身体をきつく締め付けられ益々身動きが取れなくなつていく。

「はつ、はなせつ……くつ、うあつ、くつ……そおつ……はつ、はつはあつ……うはあつ……あつ……あああつ」

真名の抵抗も虚しく、触手はぶるりと大きく震えると真名の両穴に大量の体液

を撒き散らす。

「ひあつ、くつ、はあつ……あつつ！ くつ、はあああつ！」

身体の中に流し込まれてくる熱い体液の濁流に悲鳴を上げる真名。それでも触手からの放出は止まらない。ひくひくと痙攣する真名の身体。秘所からは入りきらなかつた体液が溢れてくる。それでもお構いなしにさらにドクドクと大量の体液が注ぎ込まれていく。

「あつ、くはつ……あつはあつ……ぐつ……ぐううつ……」

あまりの量の多ささにまるで妊婦のように真名の腹部が大きくなつていく。そこでやつと満足したのか触手は真名の身体から抜け出す。

「つあつ、はつ、はあああ……」

触手が抜けた途端に真名の穴からは大量の白濁した体液が流れ落ちる。しかしすぐにそれも次に侵入してきた触手によって栓をされてしまう。

「ひぎつ、もつ……あつ……ぐつ……ぐううつ……」

ぐちより、と卑猥な音を立てて体液を掻き分け触手は再び真名の中へと入っていく。再び犯される触手の刺激に真名の身体は再び震えた。

「ぐつ、もつ、やめつ、やめろつ……こつ、このまま……だどつ、くつ……くふううつ……」

このまま触手の好き勝手に身体を蹂躪され続けるのは絶対に避けなければならぬ。考えたくない最悪の予感が真名の頭をよぎる。

「くそつ、はなせつ、離せええええつ。んふつ？ んつ、くううつ……んはつ……あつ……はああつ……」

うるさいとばかりに真名の口内にまで触手が入り込む。必死に閉じる真名の口をこじ開け舌にまで絡みつき存分に真名を味わいはじめめる。その動きはまるで人間の舌のように複雑で真名に避ける間を与えない。

「んむつ……むつ、はつ、ちゅつ、くあつ……やめつ、んんつ……くちゅつ……じゅつ……はあむつ……あああつ……あつ、あああああつ！」

触手が震え真名の口内にも体液が流し込まれる。喉を流れ込んでくる体液に息が出来ずに真名が激しく咳き込む。

「んぶつ、んつ……はつ、こほつ……がはつ、はつ……はあああ……あつ、やつ、はあああつ！」

休む間もなく再び真名の秘所にも体液が流し込まれる。

「ひあつ、まつ、まつ……あつ、くつ、くはあああつ……」

二度目の体液を流し込まれ再び叫ぶ真名。しかしそれもまたすぐに口内に侵入してきた別の触手によってぐもつた声になる。秘所もアナルも同様だった。触手によって体液が流れる前から蓋をされてしまう。

「はうつ……んんつ、んちゅつ、ああつ……はあむつ、むつ……くうつ……」

ついに心が折れたのか、それとも触手の体液にそんな成分が含まれているのか、真名の瞳が段々と輝きを失って曇つていく。



そしてついに、真名は熱病に犯されたように火照った顔で自ら進んで触手に舌を這わせ始めた。

「んふっ……ちゅっ、ちゅくっ……はああっ……あつ、はあつ……あああつ……」  
真名の口から今まで聴いたことのない甘い声が漏れる。トロンとした瞳で愛しそうに触手をしやぶる姿にあの凛々しい龍宮真名の姿は重ならなかった。

「くはっ、はっ、あああつ……いいっ、触手っ、これっ、すくいいのっ、もつと、もつと私のなかもつ、かき回して……かき回して欲しいのっ……」

真名の口からこぼれる言葉に答えるようにして真名の穴に再び触手が入っていく。待っていたとばかりに真名は身体を震わせて歓喜の声を上げる。

「ひあつ、すごっ、これすごいっ……もつと、もつと私のなかっ、かっ、かき混ぜてっ……ひうっ、んんっ……あつ、はあああつ……いいっ、きもちっ、いい……あはっ、あはははっ……」

触手の一本一本から壊れ始めている真名の身体の外にも中にも大量の精液が溶びせかけられる。

「あつ、はあああつ！ でっ、でてるっ、なかっ、いっばいっ……あつ、口にもっ……んんぐっ……んんっ、こくっ、んはあつ、はっ……あああつ……」

口内に放たれた体液までも喉を鳴らして美味しそうに飲み干す真名。すでに抵抗する気は失せてしまったようで、名残惜しそうに触手に舌を這わせている。

「んふっ、くちゅっ、はあうっ、もつと、もつとちようだいっ……おっ、おねがいだからあつ……アソコにもっ……お尻の穴にもっ……もつと、もつと熱いのっ、ほっ、欲しいのっ！」

真名の言葉に答えるかのように真名の身体に触手を這わせていく。その触手を自らの秘所に向かえ入れる。

「あはっ、いいっ、そっ、もつと、なかっ、かっ、かき回してっ……はあつ、あああつ……すごっ……おっ、おくまでっ……とどいてっ……あつ、あああああつ」

それからどれくらい経ったのだろう。真名は触手に捕らえられたままだった。その間、一時も休むことなく犯され続け真名の人格は崩壊していた。ただ与えられる刺激に反応して歓喜の声を上げるだけの人形だった。

「ひうっ、あつ、もつ、だめっ……うっ、うまれ、るっ……はっ、あああつ……」  
真名の身体には触手の種が宿っていた。その影響なのか腹は膨れ乳首の先からは白い母乳さえ出ている。

「あつ、あああつ、だめっ……もつ、あつ……でるっ……でちやうつ……あつ……はあああつ……生まれ、生まれちやうのっ……あつ、ああああ！」

ビクビクビクと真名の身体は小魚のように小刻みに震え、額にはびっしりと脂汗が浮き出る。それと同時に真名の秘所からは卵が一つ、また一つと生み出される。

「あつ、でてるっ……わっ、私のなかからっ……卵、でてるっ……あつ……んんっ……ふっ、あああつ……やっ、あつ、またっ……」

真名の愛液のせいなのか、しっとりとした卵。赤子の頭ほどもありそうな卵が真名の膣内を押し広げまだまだ出てくる。

「あつ、やっ……だめっ、これっ、はっ、はああつ……イっ、イっちやっ、あつ、はあああつ……やっ、イく、イっちやう、あつ、あはああ……」

すべての卵が真名の秘所から生み出されると、真名は恍惚の表情を浮かべて意識を失った。その真名に触手がまた種をつけようと入り込んでいく。

「んっ、あつ、あはあつ……ふうんっ……あつ……」  
意識を失っているというのに触手が入ってきたせいで真名の身体は敏感に反応してしまう。身体をくねらせ、すでに快感になってしまった触手の責めに身体全体で喜びを表している。

「あはあつ、いいっ、いいのっ……またっ、いっ、いっばいっ……わたしのなかっ、一杯に、そっ、注ぎ込んでっ……あつ、はああつ……いっ、いいっ、きもちっ、いいっ……あつ、あはああつ！」

触手から体液が放出されると同時にビクンと真名がイってしまう。

「ひうっ、あつ、イクっ、イッちやうのっ……イっちやうのっ、あつ、あはあああつ！ あひいっ……あつ、あつ、はっ……」

快感に身悶え瞳を曇らせ、だらしなく口の端をヨダレで汚す真名。そこにはもう触手に身も心も支配されてしまった女性の姿しかなかった。





おせんぼしてみる？



狼さんは  
ネギまが嫌いらしい☆  
送り狼

マスターP

ん？  
どうかしたの  
セリオ？

LINE

マスター…  
のっけから  
ファンを敵に  
回すのはどうかと

いやーんちょっと  
間違えただけやん☆

早く来なや。

みんなわかってておかししてるの。

で？  
どうしたの？

お客様が  
いらっシャってます  
マスター

お客？  
誰かしら



神楽坂...  
明日菜?



やっぱりネギまは  
メインヒロインの  
アスナだよなえ

ツインテールで  
ツンデレ萌えく

グブグブ

かさい好き。



そうだな。

萌え萌えと五月蠅いんだ  
このド醜い豚めが。

ゴラ。



えひよひよひよ

パンチラ萌えく

テラクロス



そうだな。

ヒロイン萌えだと  
この素人奴。プライドが  
ねえのか。

体むこんな  
萌えのツギハギな  
二番煎じの作品に  
よく素直に萌えら  
れるものだ

羨ましい  
くらいだ。



って、なんがいった。













## ゲスト様&メンバーのホームページ♪

### 三毛猫、遊壊蔵、闇貫き

「Angel's Messenger」

<http://home.att.ne.jp/apple/mikeneko/>

### 水陸両用

「初霜の月」

<http://www.axs-smf.net/kanna/>

### 西 北々さん

「北極鍋」

<http://arc-pan.hp.infoseek.co.jp/>

### 送り狼さん

「必殺！」

<http://www.hissatsu-style.com/>

### 浅賀葵さん

「CG Gallery HP Eye.」

<http://home.att.ne.jp/red/nori/>

## 奥付

発行 三毛猫堂本店

発行日 2006年4月23日

印刷所 ポプルス様

御意見御感想はこちら

[mikeneko@filith.sakura.ne.jp](mailto:mikeneko@filith.sakura.ne.jp)

**無断転写厳禁**



**presented by**  
**三毛猫堂本店**  
**for adult only**